土木遠景 第一回 阪高湾岸線

[文・写真] 大村 拓也

日が沈み、周囲が闇に覆われると、山から突き出た巨岩だけが満月の下に残った。風もなく、音もない。岩には、自分の影だけが映っている。ふと目面に立ったことを想像した。地上に広がるまちの光が銀河のようだ。

光輝く星々の中に、一際目立つひとすじの線を見つけた。大阪湾に浮かぶ島々を結ぶ阪神高速道路だ。等間隔に並んだオレンジ色の点が神戸から大阪へ向かって延びている。

「線は点の集合である」。高校で習った幾何学の定義を思い出した。点と点との間にも無数の点があることで、線は決して途切れることがない。

この定義を眼下に延びるあの線に当てはめるならば、道路は土木構造物という点の集合だと言えるだろう。運河に架かる大きなアーチも無数の点のひとつ。1点でも欠ければ、都市システムとしての機能を果たさない。

自動車の光跡が補助線となって、土木構造物が途切れていないことを証明している。でき上がった写真を見て、そう実感した。

おおむら・たくや
1982年生まれ。写真家。
大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦労して修めた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

[撮影地]兵庫県神戸市 六甲山天狗岩

© OMURA Takuya